



特集

災害の経験を未来に活かす

1月1日午後4時10分頃、石川県能登地方で震度7の地震が発生しました。胎内市では震度4を観測し、津波警報発表に伴い市内13か所で避難所を開設。幸いにも市内で大きな被害はありませんでしたが、多くの方が身の危険を感じたことと思います。今回の特集では、この経験をこれからの防災・減災に活かせるよう、過去の災害についても振り返るとともに、いざというときのための備えについて考えます。

問合せ 総務課防災対策係（内線1311）

災害を振り返る①

1月1日の記憶

今回の地震では津波警報が発表されました。海沿いに位置する桃崎浜のそのときの状況などについて区長さんに話を伺いました。

地震発生時の避難行動

桃崎浜は一時避難場所を集落センター裏のグラウンドとしており、当時17時10分時点で112人が避難していました。車中の人も含めると、合計で120人くらいはいたと思います。最初はグラウンドに避難していましたが、寒いので集落センターに入り、各々テレビやスマホで地震の情報を得ていました。自力で避難できない要支援者に対しては普段から集落の役員が割り当てを決めて支援することになっています。今回も要支援者の自宅へ行き避難所へ連れてきた役員もいましたが、大きな津波が予想される場合は、自身



桃崎浜区長
藤木 繁一 さん

の安全確保もあり、難しい判断が必要になると思っています。

桃崎浜自主防災組織の備え

桃崎浜は東日本大震災があった年から津波避難訓練を始め、コロナ禍を除いては毎年行ってきました。その成果が発揮されたと感じたのは、令和元年の山形県沖地震が発生したとき。あのときは津波注意報（津波予想1m以下）だったのですが、たくさんの人が集落センターに集まりました。津波に関しての情報が発表された場合、「すぐ避難しよう」という感覚が避難訓練によって身に付いているのだと感じました。

「もっと大きな津波かもしれない」という意識

今回避難所に集まった住民に対して、どれくらいの時間この場所にとどまっていれば安全なのか、区として判断するのが難しかった。震源地付近の実際の津波の高さと報道されていた情報でかなりの食い違いがあったので報道を鵜呑みにできない。1時間半程で住民には帰ってもいいと思いましたが、もう少し様子をもっと大きな津波がくるのではないかと想定し対応することが必要だと思いました。



▲桃崎浜の広報紙。津波注意報等が発表された場合の取るべき行動や、集落内の主な地点の海拔についてお知らせしている。

地震への備え

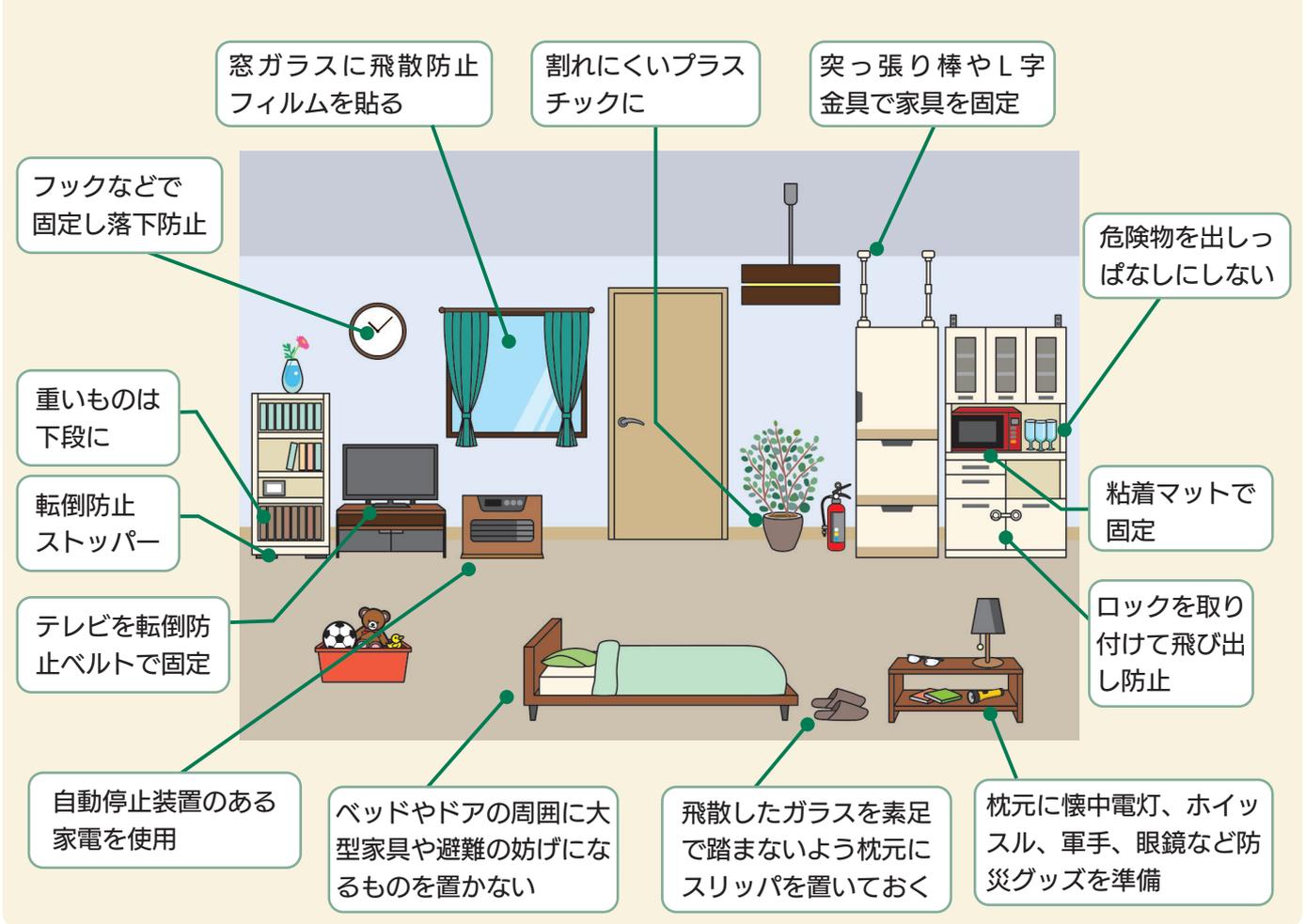
check!

家族で確認しよう

地震は発生を予測することができない災害です。普段から地震への備えをしましょう。地震発生時には何よりもまず、自分自身の命を守らなければなりません。すぐに「安全確保行動」が取れるよう確認しておきましょう。

check

1 家の中での安全対策



check

2 地震から身を守る行動

■ 屋内にいる場合

- ・頭を保護し、丈夫な机の下など安全な場所に避難してください
- ・慌てて外に飛び出さないでください
- ・窓ガラスから離れてください



■ 屋外にいる場合

- ・ブロック塀の倒壊などに注意してください
- ・看板や割れたガラスの落下に注意してください



check

3 住んでいる地域の災害リスクを知る

地震、水害、土砂災害といった各災害が発生した際の危険性を、色で塗り分けて示したハザードマップを胎内市防災ガイドブックに掲載しています。ハザードマップには避難場所も記載していますので家族で確認しておきましょう。



▲胎内市防災ガイドブックはこちらから



災害を振り返る②

56年が経過「羽越水害」

戦後最大の水害

昭和42年8月28日の豪雨により、新潟県下越地方から山形県西部にかけての広い範囲で河川の氾濫、土砂災害が発生しました。胎内川流域の胎内市（旧北蒲原郡中条町、黒川村）では、胎内川の氾濫や支流小河川の土石流により、あわせて死者・行方不明者46人、重軽傷者275人、住宅全半壊313棟、床上・床下浸水約6000棟という大きな被害を受けました。



残された土砂と石に途方に暮れる様子

「自分は大丈夫」の心理

危機に際し、人は「自分は大丈夫」「大したことはない」と考えて心の平穏を保とうとします。心理学では正常性バイアスと呼ばれています。羽越水害で多くの犠牲者が発生した背景には、想定外の降雨量があります。「自分は大丈夫」という心理から避難しなかった人も多くいたと言われています。この「自分は大丈夫」という意識を改め、万が一のことを考え、早めの避難を心がけるなど、自らの命は自ら守る意識が重要です。

災害を振り返る③

令和4年8月豪雨

一昨年8月3日から4日にかけて、日本海からのびる前線が停滞し、大気の状態が非常に不安定となった影響から、村上市、関川村、胎内市など県北地域を中心に記録的な大雨となりました。

この豪雨により、胎内市では人的被害はなかったものの、住宅の床上浸水や床下浸水（合わせて104

棟）、農地や農業用施設被害（法面崩壊、土砂流入など合わせて891か所）、道路・林道や歩道の路肩崩れなど災害の爪痕を残しました。



水沢町～新栄町付近

自主防災組織

これまで胎内市では地域の助け合いにより、災害への日頃からの備えや災害時の被害の軽減を目的とした「自主防災組織」の組織化を自治会・集落へ呼びかけ、現在は95%を超える組織率（世帯率）となりました。全国では自主防災組織の日頃からの活動や有事の際の活躍により、人的被害を防ぐことができた事例も聞かれます。市内の残る5%の地域においても組織化を推進し、地域の輪づくりとともに、地域防災力の強化を図っていきます。

地域のつながりが防災力を高める

乙では、自主防災組織として災害時の対応マニュアルの作成や避難訓練の実施、平成27年度からは「地域支え合いマップ」を作成し地域の支え合い・助け合い活動を進めてきました。各組ごとにマップを作り、要支援者世帯には印を付け、組別での避難者支援ができるようにして

います。各家庭に配布し周りの状況を把握してもらうことで、地域の連携ができると感じています。

また、1月1日に地震が発生した際、約50人の住民が一時避難所に避難しましたが、それは毎年避難訓練をしてきた成果だと私は思っています。

Interview



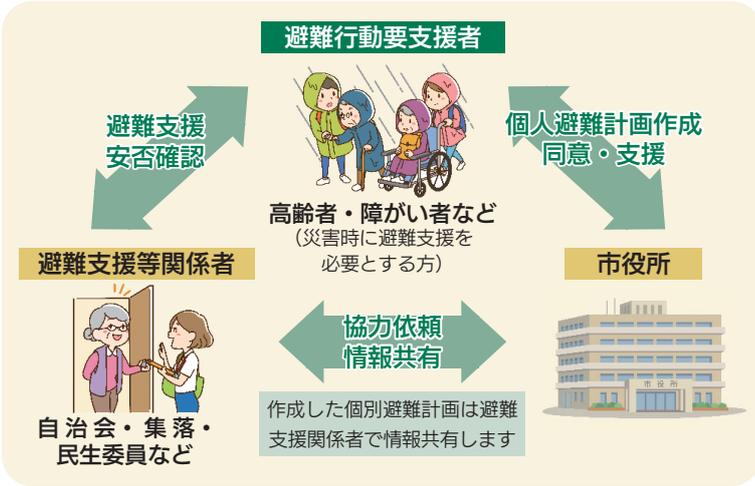
乙区長/
胎内市自主防災組織連絡協議会会長
川崎 裕司 さん

胎内市の防災対策

個別避難計画の作成

近年の災害において、高齢者や障がい者等多くの方が被害に遭われています。令和3年に災害対策基本法が改正され、個別避難計画の作成が市町村の努力義務とされました。

胎内市では、近年全国各地で頻発する大規模災害に備え、令和4年度から同計画作成に向けた取り組みを開始しました。



「個別避難計画」とは？

災害発生時に、高齢者や障がい者（避難行動要支援者）に適切な避難支援ができるよう、要支援者の状況や避難先、避難を支援する方などを記載したものです。

推進体制や連携について

個別避難計画の作成については、その性質上、市と自治会・集落の共同で取り組まなければなりません。また、福祉に関わる関係者の協力も必要となります。

現在、これら関係者で協力しながら作成に努めています。自治会・集落の役員を中心とした地域住民が支援者になっていただくなどの協力が必要不可欠と



関係者間での個人避難計画作成に向けた打ち合わせ会

なっており、普段からの支え合い、助け合いの取組が計画策定および実行するための基盤となってきました。

防災行政無線整備

胎内市では、平成21年4月から防災行政無線の運用を開始し、防災情報や行政に関する情報だけでなく、自主防災組織の訓練など地域住民の皆さんにも有効に活用されています。

現在、システムの老朽化に伴い、再整備工事を実施しています。自然災害以外の鳥獣被害などの対応や、より迅速に情報が届けられるよう、防災アプリの導入や屋外拡声子局の増設、音が遠くまで届けられるよう高性能のスピーカーへの切り替えなどを行い、令和7年度に完成する予定です。

これまでの経験を忘れず命を守る備えを

能登半島地震の発生から1か月が経ちました。改めて必要とされるのが日頃の備えです。災害が起こる前に何を備えるべきか、起こったときに何をすべきかこの機会に考えてみましょう。

今年3月スタート

「防災アプリ」

胎内市の防災情報がスマホに届く！

現在多くの方に活用いただいている「防犯・防災メール」を3月末で終了し、新たに「防災アプリ」の運用を開始します。災害時に防災行政無線放送の内容が音声と文字で届き、市外など遠方でも利用できます。

登録方法などの詳細は後日市報等でお知らせします。



胎内市もこのプロジェクトに参加しています



防災・減災
にいがたプロジェクト
2024



今年には新潟地震から60年、新潟焼山火山災害から50年、新潟・福島豪雨（7.13水害）および中越大地震から20年という、多くの災害の発生から節目の年となります。

このプロジェクトでは、繋いだ教訓や記憶を自分事化し、日々の災害への備えや命を守る行動に繋がる取り組みを進めます。